

東日本大震災からはや一年がたちました。沢山の人が、人生にも心にも、そしてわがふるさとにも、大き過ぎる傷を負ったまま、それでも懸命に未来に向かって歩もうとしています。

大地震と大津波を起し、一瞬にして人間の平穏な日常を破壊した恐ろしい大自然はまた、かぎりなくやさしいものでもありません。―今年も、変わらずに春がめぐって来しました。

岳の山々は、木々の芽がいつせいに萌え、やわらかな緑に輝いています。「山笑う」という季語がありますが、まことに、山々が笑いさざめきながら、人の心を大きく包んでくれるかのようです。

どうぞ、山笑う、春の岳にお出かけ下さり、しばしぐらゐの喧騒を忘れておくつるぎくださいませよう、お待ち申し上げます。

扇や

安達太良山に連なる鉄山のすぐ下に、今の岳温泉の始まりの「陽口温泉」があった、江戸時代のお話です。

古代に安達太良山が噴火して、火柱を噴き上げていた時、地底からは熱い湯がこんこんと湧いていたため、鉄山のふもとに温泉は、小さな湯小屋でありながら、平安時代には名湯としてはるか京の都にも知られておりました。その湯小屋を、「陽口温泉」と名付けて、して整え、「陽口温泉」と名付けて、宿の開業を勧め、遊郭も許し、番所や殿様の御殿も作ったため、みちのくの

チヨは八歳。越後の村でその日その日をやっと暮らしている貧しい家のために、桔梗屋に下働きの奉公にやってきました。

見知らぬ客にお愛想を使って相手をする湯女たちのなりわいは辛いものですが、故郷で食うや食わずの日々を送っていた女たちにとって、粗末な食事でも腹いっぱい食べられることがしあわせでした。幼いチヨも同じです。食事の度に故郷の、病気がちの母親や小さな弟や妹たち、働きづめの父親が、今頃何を食べているのか、食べられるものがあるかどうか、箸を持った

に苦しむ者など、それぞれの哀しみが暗闇の中に噴き出てくるのでした。チヨも、故郷のなつかしい家族や山や畑の景色を思い出しては枕をぬらしおりました。

チヨの夢は、一生懸命働いて、奉公の八年の年季の約束を果たして故郷に帰ることでしたから、毎日毎日、「コマねずみのように働いておりました。掃除や洗濯、炊事の手伝い、湯女の姉さんたちのおつかいの他に、山仕事もチヨの役目です。焚き木を拾ったり、山菜やきのこを採ったり、客が来る部屋に飾る花を摘んだり、毎日のように山に行かされましたが、もともと田舎育ちのチヨには、山に入るのが一番心の安らぐひとときでした。

岳温泉と松の木のお話

山奥にもかかわらず、温泉まちは大賑わいを見せました。

通りには沢山の宿や遊郭が立ち並び、湯治客を相手にする湯女も百人を超す歓楽のまちとして、近郷だけでなく、水戸あたりからも沢山の客がやってきて、不夜城さながらの繁盛ぶりでした。

まちの中ほどにある「桔梗屋」は、湯女五、六人を置く小さな宿でしたが、女将の気さくさが受けて、他の宿に負けずににぎわっておりました。

湯女たちのほとんどは、遠く近くの貧しい村から口減らしやわずかの米のために身売りしてきた女たちでした。

まま思いを馳せて、「なにぼんやりしてんだい！」と女将に叱られることも度々でした。

忙しい一日が終わった夜中になると、湯女の姉さんたちもチヨもみんな一緒に寝る部屋の、あちこちのふとんの中で、すすり泣く声ももれてきます。遠い故郷や家族を思う者、先行きの寂しさに耐えかねる者、客との実らぬ恋



松の木・松太郎

ある日のこと、チヨが山の中を歩いていると、足元に小さな松の木が倒れていました。熊か猪が地面を掘った時に放り出されたのか、根は地表に出て、か細い幹は真ん中からぽっきり折れています。「かわいそうになあ、人間ならおらの弟とおんなじぐれえの年だべな」とチヨは話しかけて、手ぬぐいを裂いて折れた幹をつないでぐるぐるしぼり、大事に持ち帰りました。

「おめえの名前は松太郎にすっぺ」チヨはその木を松太郎と名付けて、店の裏庭の隅に植えました。しっかりと添え木をし、毎水をやり、残飯をこや

し代わりに土に混ぜて、チヨはせっせと松の木の世話をしました。

一日の仕事が終わった夜、松太郎の脇に座って話をするのが、チヨの一番の楽しみになりました。その日にあつたいやなこと、ちょっと愉快だったこと、故郷のこと、家族のこと、いろいろなことを松の木に語りかけると、心の中があつたかくなるのでした。

ふた月もすると、松の木はすっかり元気になって、包帯を取ってもすくすくと真直ぐに立っているようになりました。チヨはうれしくて、毎晩の語らいがいつそう楽しみになりました。松の木は何も言いませんが、清々しい青い香りをいちだんと高く放って、チヨを励ましているように思われました。

さてその頃、温泉の二本松藩の御殿には、侍たちのほかに学者や医者、大聖人などが出入りしていましたが、その中に渡辺東岳という算学者がおりました。東岳は、藩随一といわれる優れた学者で、殿様の信頼も厚く、よく殿様のお相手に御殿に上っております。東岳は、気さくで堅苦しいことのない男で、夜は御殿を抜け出して、まちなかをぶらりぶらり散策するのをたのしみしておりました。

ある晩、裏道を歩いていると、桔梗屋の暗がりの庭の縁石に座って何かひとりしゃべっている少女が目に入りました。不思議に思っ近づいてみると、少女はかたわらの小さな松の木と

話しています。

「おやおや、いい友だちがいるもんだ」東岳が声をかけると、少女はこりして、「うん、これ、松太郎ってゆうんだ」と、そっと松の木をなでました。

東岳とチヨは、その場ですぐ友だちになりました。「木にも、石にも、水にも、何にでもたましいというものがあるんだよ。あなたの心は、松の木のためしいにきつとつたわっている」東岳はそういつてほほ笑みました。

山崩れ、まちを襲う

その年の夏は、激しい雨が何日も続き、さすがの繁盛温泉まちも、めつくり客足が減っていました。チヨの宿の女将も、「こまったもんだねえ」とため息ばかりつき、湯女たちもぼんやり雨をながめているばかりでした。

そのひどい雨に、まもなく強い風が加わってきました。チヨは、傘も役に立たない暴風雨の中を、松太郎の様子を見に行つてはまぶぬれで戻つて来て、店のみんなにバカ扱いされました。日が暮れる前には松太郎の周りを頑丈な薪で囲つてやり、自身は川で溺れかけた人のように水浸しになって、みんなは「変わりもんにはかまわねべ」とサジを投げるばかりでした。

その夜半、激しさを増すばかりの風の音に眠れずにつらうつらしていた

チヨを、揺り動かすものがありました。びっくりして目を開けると、枕元に、緑色の着物の、六つぐらいの男の子が立っています。その子は目いっぱい涙をためて、「あしたの晩、大変なことが起きる。ここから逃げろ、かならず逃げろ」というと、ついつと暗闇に溶け込んでいきました。



夜明け前にチヨが目をさますと、雨はいつそう激しくなり、ごうごうと風がうなりをあげています。「あれは夢だったんだべが」とチヨが枕元をみてみると、小さな子どもの濡れた足跡が、畳の上にかすかに残っていました。

宿々では、戸を閉め切り、外側から頑丈な板を打ちつけて補強して、みんな

な中に閉じこもっていました。チヨの店でも補強が始まりました。宿中、上を下への大騒ぎの中、チヨが女将の言いつけで二階の様子を見に階段を駆け上っていくと一目の前にタベの男の子がすくくと立っていました。「さあ、今すぐ逃げろ！」その子は、びっくりしているチヨの手をつかむと、ころげるように階段を下りて外に走ります。

「だめだ！みんな逃げねだめだ！」その子は叫びました。「今、逃げねど大変なことになるっ！」。女将や番頭や湯女たちには、その子は見えないらしく、チヨが狂ったように「みんな逃げろ！」と叫びながら表に飛び出そうとするのを必死で止めました。しかし、八歳の女の子のどこにこんな力があつたのか、恐ろしいほどの勢いでチヨは女将の手を引っ張り、前に立ちふさがる番頭に体当たりし、湯女たちの背中を押して、大暴れです。みんなその気迫に打たれて、わけもわからず暴風雨の中に飛び出しました。

緑色のきもの男の子は先頭に立つて、こつちこつちとチヨをまちの外の方に導き、さっとみんなの後ろに回って、もたもたしている湯女のお尻を押ししたり、やっぱり宿にもどろうとする飯炊きのばあさんの背中を押ししたりと、懸命に避難を助けます。男の子はしっかりとチヨの手を引っ張ってまちなかの野原めがけてすんすん走り、みんなも雨の中を泳ぐようにしてついでに走りました。

ようやく温泉まちの通りを抜けきった時、「ゴーツと恐ろしい大音響が暗闇を裂きました。鉄山の一角が崩れ落ちたのです。まちは一瞬で土砂の下敷きになってしまいました。

文政七年旧八月十五日、夜五つ過ぎ—今の八時頃のことです。

一夜明けた温泉まちは、一面の土砂とガレキの下に人々が埋もれ、地獄絵さながらでした。六百人を越える人足と医者が救出にあたったが、あまりの惨状に作業が難航したことが当時の藩の記録に残されています。

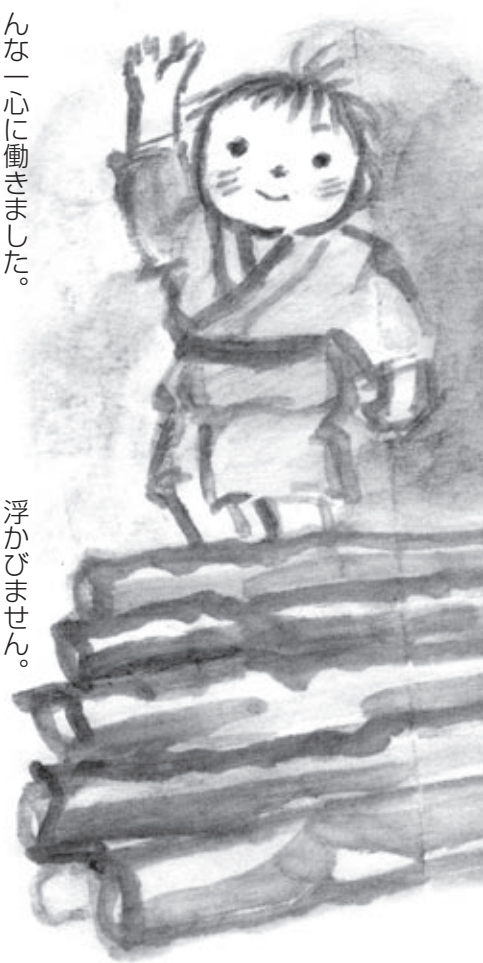
桔梗屋も土砂の下敷きになって屋根だけが泥からのぞいていましたが、みんななかりうじて命だけは無事でした。チヨが、真っ先に向かったのは松太郎のいる裏庭でした。

庭も土砂に埋もれていましたが、チヨは人足の男達に混じって泥んこになりながら、必死であたりを掘り起しました。すると、泥水の中に松太郎が横たわり、青い葉からちゃんと松の香りを放っていました。「ああ、無事で良かったなあ」チヨは松太郎を抱きしめてポロポロ泣きました。「チヨのおかげで助けられた」と、桔梗屋の女将は、チヨを抱きしめて泣きました。「うっ、ん、あの子のおかげだ」とチヨは心の中つぶやきましたが、泥だらけのきものでも、女将の胸のぬくもりがほんのり伝わってきて、チヨは命があったことにあらためて気がつき、一緒に故

郷から奉公に来て、土砂に埋まってしまったかもしれない仲間たちを思っただけで泣きました。

生き残って、行くところのない者のために、藩は避難小屋を設け、チヨもそこで暮らすことになりました。

チヨは、ガレキの中から大きな桶を見つけてきて、松太郎を大事に植えてやりました。避難小屋の者たちは、人足と一緒にガレキを片付けたり、女は人足の食事の炊き出しをしたりしてみ



んな一心に働きました。

松の木は、何事もなかったかのように桶の中に根を張り、丈を伸ばしておりました。その姿を見て、そっと話しかけるのが、前と同じように、チヨのしあわせなひとときでした。

松の木の恩返し

そして春。温泉の復興が始まりました。新しい温泉まちは、土砂崩れのあった場所から平原に下った所に作ら

れることになりました。しかし、湯元は前と同じ鉄山なので、そこから平原まで長い距離をかけて湯を引いてこなければなりません。

引き湯の設計は、藩の期待を一身に負って、渡辺東岳が行うことになりました。長い距離を、熱いまま湯を運ぶにはどうしたらいいか—東岳は、忙しく立ち働く人足の間を腕組みして行ったり来たりしながら、思案にくれておりました。しかし、どうもいい考えが

めてしまつて、父ちゃんたちがいるよ」というと、ふっと消えていきました。

朝、目をさますとチヨは、夢だったのか、夢でなかったのか、しばらくぼんやりしていました。ふと思いついて、東岳が詰めている作業小屋に走って行きました。

「せんせい、引き湯の管は、土管だと冷めっちゃうが、松の管がいいって聞いたような気がする…。ほんとだべが…」

東岳は、はたと手を打って立ち上がりました。「そつだ—松だ—松の管なら湯が冷めない！」

東岳は引き湯の設計を一気に進めました。大勢の夫婦とまちの男たちが山から松を切りだし、中をくりぬいて、湯元に運び上げながら管を下の温泉まちまでつなぎ合わせるといって大作業にとりかかりました。しかし、気の遠くなるようなこの仕事には、大変な人手と労力がかかってなかなかかどりません。しかも、雨が降ると仕事は中断で、みんな気をもむばかりでした。

ところがある雨降りの翌朝、湯元に松の管がどっさり運び上げられていました。またある朝は、切り出した松材が山のように作業場に重ねられているのです。みんなは驚いて、「山の神様だ」とその場にひざまづいて手を合わせました。

この不思議なできごとは、仕事で中断される雨の日の翌朝に限って起きま

した。「それにしても、神様はどだにして、こだにいつぱい材木運んで下さるもんだが…」みんな我慢しきれず、そっと様子を見てみようということになりました。

ある大雨の夜、まちの人たちとチヨは、作業場の隅の小屋に隠れて、戸の隙間から一晩中表をうかがってました。すると夜半過ぎ、どどどつ、どどどつ、どどどつ、と大勢の男の足音がしたかと思つと、どさつ、どさつ、と材木が投げ落とされる音、材木を重ねる音がしばらく響き、やがて森の方に向かって行く足音が響きます。姿は見えませんが、たしかに大勢の人が働いた気があり、材木だけはたしかに積み上げられています。

「あれっ、なんにも見えねえ。誰もいねえ…」みんなは茫然と座り込みました。チヨにははつきり見えませんでした。緑色のきものを着た大勢の男達の後姿と、その最後尾に小さな男の子。このあいだのあの少年が、振り向いて、にこっと笑つてチヨに手をふりながら消えていく姿が…。

夜が明けると、不思議なできごとに、人々はますます畏まり、「神様が助けて下さるんだから、おれらもがんばっぺ」と、誓い合いました。

チヨは、はっとして山に駆けて行きました。すると、森の中に立っている沢山の松の木の根元だけが、泥で汚れています。カタクリの花が絨毯を敷き詰めたように咲いて、ゆうべの雨にぬれてきらきら輝いている草むららは、泥など見あたらぬというのに。

そして、避難小屋に戻ったチヨは、あつ！と驚きの声をあげました。松太郎も、桶に入っていたというのに、泥んこです。「ああ、松の木だったんだね。松太郎と、父ちゃんや母ちゃんや、仲間が、引き湯の管だの、人足になって、助けてくれたんだね」。チヨは、松太郎の桶を抱きしめて泣きつづけました。小屋の人たちは、山崩れで誰もが家族や店や親戚を失くしていたので、泣きじゃくるチヨにそのわけもたずねず、そっと髪をなでたり、手ぬぐいを差し出したりしてくれました。そんな人たちのやさしさにチヨはまた大声で泣きました。

次の日、チヨは、桶に植えていた松太郎を、林の中に植えかえてやりました。「松太郎、ありがとな。大きくなれよ、引き湯の管になった家族だの仲間の分まで、立派な松になれよ」チヨ

新しい温泉の工事は信じられない速度で進み、その年の七月には完成し、「十文字岳温泉」と名付けられました。温泉まちは、前にも増して繁盛し、東北一の名湯として全国に知れ渡るようになりました。

桔梗屋もまたよみがえり、チヨも元気がいっぱい働きはじめました。暇があれば、松の林に行く変わり者の娘といわれましたが、十六の歳に、約束の年季を果たして、いそいそと故郷に帰って行ったというわけです。

十文字岳温泉は、戊辰戦争の時に焼き尽くされ、その後新しい土地に深堀温泉として二度目の復興をとげましたが、明治三十六年、宿の失火によって三度、姿を消しました。現在の岳温泉は、重なる大災害から立ち直った四度目の姿です。

山崩れや大火で命を落としたり、身寄りもなくこの地で果てた湯女たちをねんごろに葬った「女郎塚」は、いまもひっそり柿の木坂にその形を残しています。そして、ひそかに恋心を寄せた客を泣きながら袖を振って見送った湯女たちの、しあわせ薄かったみたまを慰めるために、土地の人たちが建てた地藏堂には、「袖ふり地藏さま」が歳月に洗われて鎮座しています。

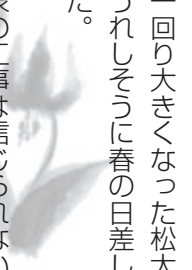
もし、森の中で、樹齢二百年を越えそうな松の太木に出会ったら、それは、チヨの思い出を年輪の中に刻んだ「松太郎」かもしれませぬ。

そして今、岳温泉の入り口に立つて、訪れる人々を迎え、帰る人々を見送っている一本の松の木も、松太郎の子孫かもしれない。

岳の森を、草原を、そして道ばたを風が渡って行く時、耳を澄ませて、さやさやと鳴る松の声を聴いてやってください。

扇や・ペア宿泊券をどうぞ

●大切な方、親しい方へのあったかいプレゼントに、扇やのペア宿泊券（お二人でご一泊三万円）はいかがでしょう。



岳温泉 野の花一輪香る宿

政府登録旅館

あだたらの宿 扇や

福島県二本松市岳温泉1-3
TEL.0243(24)2001 FAX.0243(24)2004